二〇一一年度　入学試験問題

経済学部A方式Ⅰ日程・社会学部A方式Ⅰ日程・現代福祉学部A方式

二限　国　語（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

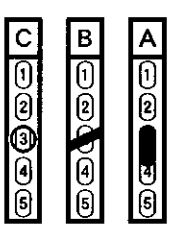
マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はＨＢの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

(一)　正しいマークの例

(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

◇M15(151—392)

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

「資源」というと、誰でも石油や石炭などのエネルギー源や鉱物資源のことを考えがちである。しかし、ここでは資源という概念をもう少し広くとって考えたい。たとえば、有害紫外線を遮断してくれる成層圏オゾン層も資源だし、地球の温度を平均十五℃に保ってくれる大気も資源である。つまり、市場価値で測れようと測れまいと、人間ひいては生物にとって便益をもたらしてくれるものをすべて資源と考えるのである。

さて、資源には、経済主体(複数の主体のこともある)によって所有ないし占有されて利用される資源と、誰によっても所有・占有されない資源がある。たとえば、個人の所有する林地、あるいは国有の林地は前者のタイプの資源である。一方、海洋の漁場や大気は後者のタイプに属する。はなはだ(ア)マギらわしいことに、複数の主体によって利用される可能性のある資源を共有資源と呼ぶことがある。

さて環境問題の核心は、共有資源の適正利用の失敗であるとする考え方がある。この見方の典型的な例が、ギャレット・ハーディンの主張した「コモンズの悲劇」である。ここでコモンズとは共有資源ないし共有地のことをさす。コモンズの悲劇とは、(イ)オオムね次のようなことである。共有地では、人々は自己利益のみを考え、他の利用者のことは考えない。どの利用者も皆同じように利己的に行動するから、共有地を過剰に利用してしまい、その結果その土地は荒れ果ててしまう。たとえば共有の放牧地の場合、皆が家畜を過剰に放牧することによって、草がなくなり荒れ地と化す、というのだ。この考え方は、世間ではしばしば起きるように、ネーミングのうまさと発表したタイミングの良さで非常に有名になった。

コモンズの悲劇は、一九六八年、先進国で公害が深刻化の一途をたどる時代に発表された。しかも、『サイエンス』という著名な科学専門誌に掲載されたため、多くの人々がこの考え方に共鳴した。確かに大気や広域水系はコモンズ(共有資源)である。大気や広域水系に汚染物質を排出するのは、利用者が他の利用者のことを考えず、自己利益のことだけ考えて行動するからである。このため、当該資源が劣化して皆が被害を被るという悲劇が起きてしまう。なるほどコモンズの悲劇が起きている、と誰もが考えてしまう。

だがよく考えてほしい。共有地だからといって必ずそのような悲劇が起きるわけではないのだ。日本の近世の入会地は村落共同体の共有地だった。しかし、ハーディンのいうような悲劇が起きたかというと必ずしもそうではない。むしろ、人々は協力して入会地を有効利用したのである。中世西欧の農耕地も同様である。囲い込みが起きる前の開放耕作地は農村共同体の共有地だったと解釈できる。農民は協力して何頭かの牛馬で畑をすき返し、耕したのである。しかも、一定の期間交替で畝(うね)の利用をすることもあった。どちらの例でも悲劇は起きなかった。

このように「コモンズの悲劇」がいつも起きているかのように主張するとそれは嘘になってしまう。コモンズだからといって必ず悲劇が起きるというわけではない。それではハーディンが嘘つきであったかというとそれも言い過ぎになる。(a)彼は間違ったのである。コモンズだからといって悲劇が起きるのではなく、［A］であるから資源の過剰利用という悲劇が起きてしまうのである。

かつて、カスピ海のチョウザメの乱獲が問題になった。何カ国もが接するカスピ海では、監視が厳しくないとほとんど誰でも近づき漁ができてしまう。誰よりも先にチョウザメを獲れば、キャビアを売ることによって儲けられる。チョウザメが成長するのを待ったり、獲りすぎないように配慮したところで、他の人間が先に獲ってしまったら意味はない。そんな配慮を他人がするとは考えられない、だから自分が先に獲って儲ける。こうしてカスピ海のチョウザメは乱獲されたのである。まさにオープン・アクセスゆえの悲劇である。仮にチョウザメがカスピ海からいなくなったら、もう誰もキャビアを売って生計を立てることはできなくなる。

もう少しオープン・アクセスの悲劇について考えてみよう。よく資源がなくなる、枯渇するというとき、人は化石燃料資源や鉱物資源などの天然資源について語ることが多い。もちろんこうした資源もいつかはなくなるだろうから、そう思うのも当然である。だが、歴史を振り返ってみると、化石燃料資源や鉱物資源などの再生不可能資源(枯渇性資源)よりも再生可能資源の方が枯渇してしまうケースが多いのに驚く。

有名な例は、マダガスカル島近くのモーリシャスに生息していたドードーという極めて珍しい形をした鳥である。十六世紀、ヨーロッパ人としてはじめてポルトガル人がモーリシャスを見つけた。そこにいたのがこの奇妙な飛ぶことのできない鳥である。食料としても、また見世物としても珍重されたらしく、それまで経済的な意味での希少性のなかったドードーはあっという間に希少性のある資源となった。しかも、無所有の鳥であるからオープン・アクセスが支配するところとなり、十八世紀には絶滅してしまった。ヨーロッパ人の連れてきた犬などの家畜が、ドードーの絶滅に(b)一役買ったという説もある。

もう一つの例がアメリカのリョコウバトである。ヨーロッパの植民者がアメリカ大陸に到達したころ、大量のリョコウバトがいたとされている。リョコウバトはとても美味で、人間の食料の対象となった。加えて、銃による狩猟の対象ともなった。リョコウバトは入植者にとって［　B　］存在だったのだ。ドードーと同じく、無所有で希少性の出てきた資源がオープン・アクセスのままであった。いずれは絶滅するかもしれないなどということを考えずに皆が狩猟したため、二十世紀初頭までには絶滅してしまった。

以上の例とは異なった性質の例を挙げよう。ギャレット・ハーディンのコモンズの悲劇の反例として、日本の近世の入会地について述べた。確かに村落共同体の共有物であった入会地は長い間共有利用のためのルールが成立し、過剰利用に陥ることなく利用された。燃料用の薪や肥料用の下草は、共同体の成員が自家利用のために採取した。成員どうしの監視のいき届いた社会では、あえて共同体のルールを破る動機は小さいし、オープン・アクセスになることもない。共同して暮らすことが最も重要なことだからである。

しかし、近世末期に向けて、商品化の波が村落共同体を飲み込むようになると、事態は違ってくる。資源利用は自家利用の範囲を超え、採取した薪や、薪から生産した炭を市場で売ることが可能になる。こうなると入会地にある資源の希少性は大きくなる。市場性を持つようになるからである。すると、共同体の成員にもルールを破って資源を過剰採取する動機が出てくる。販売価値は大きくなったのだし、ルールを破って共同体から罰せられても、村を離れて暮らせばよい。こうして解体した入会地、あるいは私有地化された入会地もあったという。

(c) 問題の要点は何だろうか。資源が無所有であり、オープン・アクセスの対象であっても経済的な希少性が小さければ、人間によって過剰利用されることはなく、オープン・アクセスの悲劇は起きにくい。ところが、希少性は歴史のなかで大きく変化する。経済・社会・技術・文化・気候の変化や人の流動の変化によってそれまで希少性の小さかった無所有の資源が大きな希少性を持つようになることがある。高い希少性の資源にオープン・アクセスがいきわたるようになると、がぜん過剰利用、ひいては枯渇ないし絶滅の可能性が出てくる。

これは、大気や広域水系などの資源にも当てはまる。大気や広域水系は、汚染物質の捨て場所として有用な資源である。捨てられる汚染物質の量が小さいかあるいは捨てる工場が少なければ、資源としての大気や広域水系の希少性は小さい。しかし、経済が発展・成長し技術水準も高くなってくると、大気や広域水系の捨て場所としての資源価値は高まる。しかもオープン・アクセスなのだから過剰利用され、資源が劣化するのである。

（細田衛士著『環境と経済の文明史』より。ただし原文の一部を変更してある。）

問一　傍線部(ア)、(イ)のカタカナの部分にふさわしい漢字を含む文章を、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

(ア)　マギらわしい

1　ギゼン者を軽蔑する。
2　ルイジした表現を使う。
3　フンショク決算を見破る。
4　国際的なフンソウに発展する。
5　昆虫が木の葉にギタイしている。

(イ)　オオムね

1　将軍がガイセンする。
2　難局を前にキガイを示す。
3　複雑な事件をソウカツする。
4　主張のロンシを明らかにする。
5　事柄のガイゼンセイについて考える。

問二　本文中の空欄 A に入る最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　みんなが欲しがるような状態
2　村落共同体が成立している状態
3　共同利用のためのルールがある状態
4　他人のことが考えられていない状態
5　誰でもじゃまされずに自由に接近できる状態

問三　本文中の空欄 B に入る最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　珍しい　2　奇妙な　3　魅力的な　4　不可欠な　5　手つかずの

問四　傍線部(a)「彼は間違ったのである」の内容として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　再生不可能資源のことを考えていなかった。
2　希少性が変化することはないと考えていた。
3　資源が市場性を持つことを考えていなかった。
4　利用のルールが重要であることを考えていなかった。
5　人間は自己利益を追求して行動する存在だと考えていた。

問五　傍線部(b)に「一役買った」とあるが、「一役買う」という慣用表現の本来の意味として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　陰ながら支える。
2　粋な計らいをする。
3　予想外の役目を果たす。
4　自分からしゃしゃり出る。
5　役割をすすんで引き受ける。

問六　傍線部(c)「問題の要点は何だろうか」への答えとして最も適切な内容を含むものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　薪へのアクセスが監視されているかどうか、ということ。
2　希少性のある資源が再生可能なものであるかどうか、ということ。
3　資源の市場性と再生可能性が歴史のなかで大きく変化する、ということ。
4　市場で売れる炭を作るための薪が自由に採取できるかどうか、ということ。
5　村落共同体においてどうすれば利己的な人々が協力し合えるか、ということ。

問七　筆者の主張と合致する内容の文章を、つぎの1～8の中からすべて選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　国有林はオープン・アクセスの資源である。
2　化石燃料のような資源の価値は劣化することがない。
3　大気や広域水系の希少性は経済や技術の発展で高まる。
4　チョウザメも共有資源だと見なされていれば乱獲されることもなかった。
5　村落共同体は監視のいき届いた社会なので共有地の悲劇は起こりにくい。
6　コモンズの悲劇もオープン・アクセスの悲劇も基本的な仕組みはまったく同じである。
7　ドードーやリョコウバトなどの枯渇性資源が絶滅してしまうケースは決して珍しくない。
8　コモンズの悲劇に共鳴する人が多かったのは、ひとえにそのネーミングのうまさによる。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

教室であの子はいつも［ A ］。

母が学校の先生に会いに行くと、いつもそういわれて帰ってきた。どうして、ちゃんと先生のいうことを聞いてられないの？　母はなさけなさそうに、わたしを叱った。

聞いてないわけじゃないのよ。わたしにも言い分はあった。聞いてると、そこからいっぱい考えがわいてきて、先生のいってることがわからなくなるの。

そういうのを、脱線っていうのよ。お願いだから、脱線しないで。

脱線しないようにしよう。わたしは(a)無駄な決心をした。

つめたい空気のなかを汽車は走っていた。遠い雪の斜面に黒く凍りついたような家が一軒見えたり、鉄橋の枕木のあいだから覗いている川の水面に細かい波がちぢれていたり、黄色い電灯の光に照らされた駅舎がさっとうしろに流れたりした。通いなれた沿線であるはずなのに、いったいそれがどのあたりだったか、記憶をたぐりよせようにも、すべてが闇に沈み澱んだようになって思い出せない。夜行列車に乗るようになったのは、戦争が終わった十六歳の秋、家族をはなれて東京で学生生活を送るようになってからだから、それはたぶん一九四七、八年の頃だったろう。それでもまだ、特急とか急行とかというのではなく鈍行の夜行列車で、堅い座席で寒さに目がさめるたびに、ああ、あと何時間ぐらいすれば東京に着くのだろうと、窓の外を過ぎてゆく電柱を、一本、一本、数えたりした。一千本になったら、東京。他愛ない事を自分にいいきかせては、また眠りに落ちる。

ぐっすり眠っていて、ふと目がさめると列車はまったく見おぼえのない、山を背にした小さな駅にとまっていた。停車はしていても、あたりに駅員がいるわけでも、アナウンスが聞こえるわけでもなくて、なにもかもが眠りこけた風景のなかで、近

くに滝でもあるのか、高いところから水の落ちる音だけが暗いなかにひびいていた。

どれぐらい停車していたのだろう。やがて、かん高い汽笛が前方にひびいて、列車ぜんたいにながいしゃっくりに似た軋みが伝わると、ゆっくり動き出した。黒い瓦屋根の駅舎のゆがんだような板壁が遠のいていく。列車が速度をはやめるにつれて、線路わきの電柱の飛ぶ速度がせわしくなる。そのとき、まったく唐突に、ひとつの考えがまるで季節はずれの雪のように降ってきてわたしの意識をゆさぶった。

《この列車は、ひとつひとつの駅でひろわれるのを待っている「時間」を、いわば集金人のようにひとつひとつ集めながら走っているのだ。列車が「時間」にしたがって走っているのではなくて。

ひろわれた「時間」は、列車のおかげではじめてひとつのつながった流れになる。いっぽう、列車にひろいそこなわれた「時間」は、あちこちの駅で孤立して朝を迎え、そのまま、摘まれないキノコみたいにくさってしまう。

(b) 列車がこの仕事をするのは、夜だけだ。夜になると、「時間」はつめたい流れ星のように空から降ってきて、駅で列車に連れ去られるのを待っている》

一連のとりとめないセンテンスがつぎつぎにあたまに浮かんでは消えていった。もう旅が退屈ではなかった。暖房のきかない列車も気にならなかった。

その夜、雪のなかの小さな駅舎の板壁に目をこらしていたわたしのところに、暗い雪片のように空から降ってきた考えの束は、日本の復興がすすむにつれて、夜行列車に乗るようなことがだんだんと少なくなっても、あのころの旅の記憶といっしょにふつふつとわたしのなかに生きつづけた。

何年か過ぎて、わたしはパリにいた。大学の夏休みがはじまったばかりのある夕方、わたしはリヨン駅からローマ行きの夜行列車に乗りこんだ。一年まえ、日本からの船がジェノワの港に着いたとき、道ばたでたえず耳に飛びこんできたイタリア語が、あの町を覆っていた嘘のように透明な空の記憶と重なって忘れられなかったし、凍った北国の都会に自分を合わせられな

くて、太陽がオレンジの色に燦く国に帰りたかった。いつかその国のことばを、自分のものにしてしまいたかった。

―中略―

六月の終りというのに、アルプスを越える列車の客室にはうっすらと暖房が入っていた。窓のそとはただ暗いだけで、平野を走っているのか丘陵地なのかさえも見当がつかないまま、一本、また一本とうしろに飛んで行く電柱だけが、(c)この世で自分の位置をはかるたったひとつの手がかりのように思えた。そのとき、もういちど、あの遠いころの列車の夜の記憶がもどった。

《夜、駅ごとに待っている「時間」の断片を、夜行列車はたんねんに拾い集めてはそれらをひとつにつなぎあわせる》

脱線、という言葉があたまに浮かんで、母はどうしているだろうと思った。自分はほんとうに脱線が好きなんだろうか。それから、こう思った。わたしのは、脱線というのとはすこしちがう。線路に沿って走らないと、思考と思考はつながらない。それくらいなら、わたしにだってわかる。つなげることがまず大切なのだということぐらいは。でも、どれがいったい線路なのか。

「時間」、とあのころ言葉の意味を深く考えることもなしに呼んでいたものが「記憶」と変換可能かもしれないとまでは、まだ考えついていなかった。思考、あるいは五官が感じていたことを、「線路に沿って」ひとまとめの文章につくりあげるまでには、地道な手習いが必要なことも、暗闇をいくつも通りぬけ、(d)記憶の原石を絶望的なほどくりかえし磨きあげることで、燦々と光を放つものに仕立てあげなければならないことも、まだわからないで、わたしはあせってばかりいた。

ジュネーヴ、というアナウンスが聞こえたように思った。駅の名を知らせるアナウンスというよりは、なにかに驚いて人が発する短くてするどい叫びのようだった。ずっしりと重たい窓を両手でもち上げてプラットフォームをのぞいてみたが、柱のあいだから弱々しい朝の光が斜めに射しているだけで、駅はほとんど無人に見えた。三つの国の言葉が話される国だ、そう思って、私はがらんとした朝の駅を見渡していた。

《「時間」が駅で待っていて、夜行列車はそれを集めてひとつにつなげるために、駅から駅へ旅をつづけている》

もともと、ひとつのまずしいイメージから滲み出たにすぎない言葉の束なのに、それは、たとえば［　B　］、ごく最初からしっかりした実在をもってわたしのところにやって来たものだから、私はマヌケなメンドリのように両手でその言葉の束だけを大切に不器用に抱えて、あたためながら歩きつづけた。

「線路に沿ってつなげる」という縦糸は、それ自体、ものがたる人間にとって不可欠だ。だが同時に、それだけでは、いい物語は成立しない。いろいろ異質な要素を、(e)となり町の山車のようにそのなかに招きいれて物語を人間化しなければならない。ヒトを引合いにもってこなくてはならない。脱線というのではなくて、縦糸の論理を、具体性、あるいは人間の世界という横糸につなげることが大切なのだ。たいていの人が、ごく若いとき理解してしまうそんなことを私がわかるようになったのは、老い、と人々が呼ぶ年齢に到ってからだった。みなが店をばたばた閉めはじめる夜の街を、息せききって走りまわっている自分を想像することがある。

そんなとき、あの山間の小さな駅の暗さと、ジュネーヴ！　という、短い、鋭い叫びが記憶の底(f)でうずく。

（須賀敦子著『霧のむこうに住みたい』より。ただし原文の一部を変更してある。）

問一　本文中の空欄 A 、 B に入る最も適切なものを、つぎの1～5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

A

1　居眠りをしています
2　ひとりぼっちです
3　寂しそうな顔をしています
4　気を散らしています
5　イライラしています

B

1　成人のまなざしをそなえて生まれた赤ん坊のように
2　生活に深く染み着いた貧困のように
3　生き生きと生命力にあふれた若木のように
4　年月を経て味わいを深めたワインのように
5　季節はずれに鳴り響く雷鳴のように

問二　文中の傍線部(a)に「無駄な決心をした」とあるが、著者がそう思った理由として最も近いものをつぎの1～6の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　母親への密やかな反発心があるために、その決心が表面的に過ぎないことを子供ごころに分かっていたから。

2　著者自身は意志が弱いことを自覚していたので、その決心が長続きしないことを分かっていたから。

3　母親の理不尽な小言に屈服しただけで、著者自身はまったくそれに納得していなかったから。

4　成長してからも論理的思考が不得手で苦労した著者は、子供時代の自分が欠点の克服を簡単に考えていたことが分かるようになったから。

5　ものごとをあれこれと連想してしまう著者生来の気質を、母親の小言で単なる脱線と無理に信じ込もうとしたから。

6　論理的思考で脱線しないようにするためには、著者自身がもっと成長することが必要だったから。

問三　文中の傍線部(b)に「列車がこの仕事をするのは、夜だけだ」とあるが、著者はこの「夜」でどのようなことを喩えようとしているのか。その説明として最も近いものをつぎの1～6の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　文章を創作する作家にとって、昼は論理的思考が邪魔をするので、夜にならないと過去の記憶を材料にした創作活動がうまく行えないことを喩えている。

2　思春期の少女の文芸的な直感が実際の作品として文章化されるまでには多くの年月と人生経験が必要なことを過ごしてきた夜の数に喩えている。

3　思い出がひとつの物語になるとき、記憶の底に沈んでいた過去のいくつものエピソードが連想とともに互いに結びついていく半ば無意識的な出来事を夜の仕事に喩えている。

4　人生の悲しい思い出というものは、そうたやすく癒されるものではなく、それが作品として文章化されるまでには、多くの眠れない夜を過ごさねばならないことを夜に走る列車に喩えている。

5　いろいろな人生の思い出が、イメージが活発になる夜の夢の中でつなぎ合わされる様相を強調するための比喩。

6　思春期の少女のいろいろな思い出や希望が、メルヘン豊かに湧いてくるさまを夜汽車に喩えている。

問四　文中の傍線部(c)で、電柱が「この世で自分の位置をはかるたったひとつの手がかりのように思えた」とあるが、著者がそう思った理由の説明として最も近いものをつぎの1～6の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　慣れない異国の生活に疲れ果てていた著者は、生きる意欲を失いかけていたから。

2　電柱がうしろに飛んでいく単調な刺激のせいで著者は催眠状態に陥っていたから。

3　昔の記憶と今の記憶が混在してしまい、旅する意味を見失いかけていたから。

4　単調な長旅に疲れ果て、気分がすぐれず厭世的になっていたから。

5　異国の地で著者はホームシックになり、寄る辺のない気持ちになっていたから。

6　車外が暗くて現実感が薄れ、視野に入ってくるのが電柱の姿だけだったから。

問五　文中の傍線部(d)で、「記憶の原石を絶望的なほどくりかえし磨きあげること」とあるが、著者はそれでどのようなことを表現しようとしているのか。その説明として最も近いものをつぎの1～6の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　人生のいろいろなエピソードを繰り返し想起して文章化の試行錯誤を積み重ね、すばらしい作品にまで仕上げる作業を表現している。

2　無意識の淵に沈んでいた曖昧な記憶を、光り輝くように意識化するために繰り返し注意を集中するさまを表現している。

3　地道な文章化作業の手習いを経ることで、石のように堅く閉ざされていた人生の記憶の断片が光り輝くようになるさまを表現している。

4　人生経験を論理的な文章に組み立てなおすことで、光り輝くような文芸作品を生み出す作業を表現している。

5　文筆家になるという絶望的に暗い道のりは、地道な手習いを繰り返すことでのみ達成されることを表現している。

6　人生の思い出を光り輝く文芸作品に練り上げるためには、さまざまな葛藤を乗り越えていく必要があることを表現している。

問六　文中の傍線部(e)で、「となり町の山車のようにそのなかに招きいれて物語を人間化しなければならない」とあるが、ここではどのような意味か。その説明として最も近いものをつぎの1～6の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　祭りの山車が、そこに参加する人々の人生や思い出が触れ合うことで豊かになるように、人生の思い出を生き生きと物語るには人々の出会いと共同作業によって文章が紡ぎだされる必要があることを表現している。

2　豊かな物語を作り上げるためには論理の縦横をしっかりと明確にしておく必要があり、そこに様々な人間の存在が盛り込まれなければならないことを表現している。

3　人生の思い出を上手に物語にするためには、文章の筋にそって著者のさまざまな思い出を、人々との具体的な出会いやエピソードを交えながら生き生きと描き出すことが大切なことを喩えている。

4　祭りの山車が、参加者のいろいろな役割分担や人生の思い入れを織り込みながら豊かになるように、人生の思い出をうまく物語にするためには、論理的な筋書きで文章を整えるだけでなく、いろいろな文章表現の要素を組み合わせる必要があることを表している。

5　祭りの山車がいろいろな人の思いを乗せて練り歩くように、論理的な筋道を山車の引き綱に、また物語の登場人物を山車の中にいる祭りの主催者に喩えて表現している。

6　著者自身のとなりまちの山車の思い出に重ねあわせて、若いときの著者には理解することのできなかった論理と具体的な人生の思い出の関係を表現している。

問七　文中の傍線部(f)で、「うずく」という表現が使われている。この表現を使った著者の意図の説明として最も近いものをつぎの1～6の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　自分の能力の乏しさにもかかわらず、長い人生を経て作家になれた複雑な思いを表現するため。

2　作家になるまで長い年月がかかった著者の苦労の尋常ならざるさまを表現するため。

3　老年期になって、はじめて思春期・青年期の思い出の大切さが分かるようになった驚きを表現するため。

4　物語を創作するための要件を、老年期の著者が若い頃の原点の記憶とともに体感する生生しさを表現するため。

5　作家になるために西洋に留学し、いろいろな苦労を重ねてきた著者が人生をなつかしむさまを表現するため。

6　作家になるために、他の人より長い道のりが必要だった著者自身の人生を老年期の辛さに重ね合わせて表現するため。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

この世でもっとも美しいものは廃墟である、というのが私の変わらざる信念である。シチリア島を旅したとき、とどろく雷鳴と昼の闇をつらぬく稲妻の下、大粒の雨に打たれて、孤高に立ちつくすセリヌンテのギリシャ神殿の廃墟を見たことがある。そこに凝縮した二千五百年の時間が、ゆっくりと崩壊し続けるひそかな音が聞こえるような感動に襲われた。

この世でもっともぜいたくな美の実現の仕方は、廃墟を作ることであろう。ただ、廃墟というのは始めから作ろうとして作れるものではない。廃墟であるためには、まず洗練され、(a)贅をつくした最高の構築物を完成しなければならない。

それをみがきあげるように使い、高度の文化を築きあげ、人工的に破壊するというのではなくて、文明の生理的衰退に合わせた長い長い時間をかけて、自然が不可逆的な物理的・化学的反応を進行させ、無駄なものをすっかり崩壊しつくして、①隠し続けてきた何ものかが現れ、それで初めて廃墟が完成するのである。その廃墟は、時とともに成長し、変容し、そして風に吹かれ、ついには何もなくなる。ギリシャやローマの廃墟が、ガンダーラやシルクロードの仏跡が、エジプトやペルシャの遺蹟が、かくも美しく崇高であるのは、その大もとである古代文明が、たとえようもなく見事に花開いて、さらにそれが回復しようもなく失われ、ただそれを偲ぶ最小限の遺構のみが、絶対に修正不可能な形で残っているからである。それはまさしく絶対であり、限界であり、孤高であり、すべてがそこに凝縮したものである。それは単に、ほろびてゆくものは美しい、などという［　A　］的なものではなくて、時間という逆もどりのできない過程のゆきつくなれの果てである。

②「老い」の姿というのが、廃墟のようだったらよいと、ふと思った。そのためには、老いの前の完成した構築が優れたものでなければならないし、老いに至る過程が自然でなければならない。「老婆は一日にしてならず」という名文句があるが、老いを完成する前段階は大変むずかしい。それだからこそ、老化については、文化論、社会論のみならず、医学の介入も必要になってくるのであろう。健やかに老い、神のように孤高で、そして永遠の廃墟の中に戻ってゆく旅人というのは、素敵だ。

お能の最高の秘曲は、老女物と呼ばれるもので、いずれも百歳に余る老女が主役である。「関寺小町」「鸚鵡(おうむ)小町」はともに、

百歳を越えた小野小町のなれの果てで、ありし日の栄華と美をなつかしむ、枯れ枯れと、美しい舞いの衣をひるがえす。ありし日の才女は、たとえ衰え果てても、真実の高みからこの世を見下ろす。「関寺小町」では、関寺のわら屋に隠栖(b)している百歳を越す小町が七夕の夜、稚児の求めに応じて歌を詠み舞いを舞う。このときの小町には、関寺の鐘の声が諸行ムジョウ(ア)と響いたとしても、聞こえなくなった耳には益もなしという老残の身である。杖にすがって舞う舞いこそ、皮肉なことにお能の最奥の秘曲で、凡手のとうていなすべきものではない。

「姨捨(おばすて)」は、姨捨山伝説にちなんだ曲であるが、コウリョウ(イ)たる姨捨山にさんさんと照り渡る月光のもとに、すでに人間を卒業して、大宇宙にまさに還元されようとする老女の超越のさまを現す。わずかに残るこの世の名残りに、白衣をひるがえして舞う老女は、もはや人でもなく女でもない。

老女もののもうひとつの傑作は、「卒都婆(そとば)小町」である。高野山の高僧の前に、百歳に余る老いさらばえた乞食女が現れる。橋掛かりに立ち止まって胸杖をして休息しながら、まさに百年のかなたからゆっくりと歩いて来る。道ばたの倒れた卒都婆に腰をかけて休んでいるので、僧がとがめる。すると老女は、もとは仏体を現すという卒都婆であったとしてもいまは朽ち木、老婆といえどもともとは美女であった私が腰かけるのは、構わないばかりかクドク(ウ)にさえなるでしょう、と舌端火を吹く卒都婆問答をしかける。論破された高僧は何という悟りを開いた乞食女であることかと驚き、老婆の足もとに跪いて三度の礼をなすと、老婆は勢いづいて、「極楽の中だったら悪いということもあるでしょうが、ここは浮世、固いことをおっしゃいますな」とうそぶき、すたすたと立ち去ろうとするのである。

このほかにも、年老いた歌詠みの白拍子の霊の執心(c)を描いた「檜垣(ひがき)」という能があり、永遠に流れ去る水の心を舞いに託して、時の彼方へと過ぎてゆく老境を垣間みせる。

広島から瀬戸内海の鹿島の方まで車を走らせたことがある。知り合いの診療所の先生の紹介で、初夏の日ざしにたゆとう内海に向かって終日釣りをしている老人に会った。毎日そこで糸を垂れているという。左手が不自由で満足に釣りもできないと嘆く老人は、たしかにたくさんのゼンマイがほどけ、いくつかの歯車が噛(か)み合わない。しかしその後ろ姿には、シチリアの海

に向かうダンガイ(エ)の上にたつギリシャ劇場の廃墟に立たせたとしても、不自然ではない劇中のひとがあった。

メキシコの小さな港町に立ち寄ったときも、同じような老人に出会った。長旅に疲れ果てて、海に面した小さな木造のホテルに着くと、ロビーの右手にバーがあった。見ると一人の老人がカウンターに座って飲んでいる。チェックインしてバーに行くと、人懐っこい眼で話しかけてくる。私にはスペイン語はほとんどわからない。ただバーテンダーの説明を総合すると、かつては漁師だったこの老人が、いまは毎日ここでテキーラを飲んで日を過ごしているということであった。額にきざまれたシワと、節くれだった四角い指と、いかにも潮の匂いがするようながっしりとした体つきは、[B]の老人のようにもはや海の精霊みたいだった。私はテキーラといっしょにカジる岩塩の一皿をあげて、二、三杯一緒に飲んで寝床にもどった。波の音で終夜寝つかれなかった。

翌日午後も早いころ、出発する前にと思ってもう一度あのバーに立ち寄った。海に面したバーには斜めの日ざしがあたり、他に客はなかった。ただ、昨日と同じとまり木に、きのうと全く同じ後ろ姿で、あの老人が座っていた。まるで、この過ぎ去った十数時間が存在しなかったように、彼はそのままそこにいた。その情景はふしぎに私の網膜にやきついて、いまでもありありと思い出すことができる。

私たちの脳では、毎日何十万という脳細胞が脱落してゆく。冬の日、三階にある私の事務室の窓の前に立つ樫の木の葉がいっせいに落ちてゆく。しがみついて数えるほどになった枯れ葉も、ついに凩(こがらし)に吹きとばされると、まるで脳の血管造影をしたように、両手をまるめたような形に枝が露出する。夏の間あんなに憎らしいほど繁っていた葉がなくなると、残酷なまでに荒々しい枝が、すき間だらけの空間をささえている。そこを風が吹き抜けてゆく。ああ、あれが自分の脳みそかと思いながら、その微細な枝の先々まで見つめていると、ふしぎに乾いた心境になってくる。

脳の生理的老化は、防ぐことはできない。しかし、失われてゆくものの中で、本当にエッセンシャルなもののみが残り、もはや花も葉もないが、風が吹きならすヒューヒューという音、笞(むち)のようにしなって、骨組みだけになってしまった脳が、ひょっとすると最後の何かを教えてくれるのかもしれない。そしてその最後の何かというのは、私たちが生涯かかって問い続

ける不条理なのかもしれない。そうなってみないとだれにもわかりはしない。

そう思うと、③私には「老い」が爽やかなものに思えてくる。それが風の吹きぬける廃墟であるとしても、ゼンマイのすっかりほどけた仕かけ人形であるにしても、私たちが無に帰するためにはどうしても立ち寄らねばならない海辺の町のように思える。

（多田富雄著『ビルマの鳥の木』所収、「『老い』断章」より。ただし原文の一部を変更してある。）

問一　傍線部(ア)～(エ)の漢字表記として正しいものを、つぎの1～10の中からそれぞれ二つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

(ア)　ムジョウ

1　夢　2　霧　3　無　4　矛　5　憮

6　情　7　状　8　静　9　乗　10　常

(イ)　コウリョウ

1　耕　2　劫　3　洪　4　光　5　荒

6　涼　7　量　8　了　9　遼　10　瞭

(ウ)　クドク

1　功　2　苦　3　供　4　貢　5　垢

6　読　7　得　8　毒　9　徳　10　独

(エ)　ダンガイ

1　段　2　弾　3　団　4　旦　5　断

6　崖　7　階　8　涯　9　劾　10　岩

問二　傍線部(a)〜(c)の語句の意味として、最も適切なものをつぎの1〜5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

(a)　贅をつくした

1　流行の最先端を取り入れた　　2　真心をこめて一所懸命にした

3　できるかぎりのぜいたくをした　　4　あらゆる手段を講じて努力をした

5　最高のいけにえを供するような周到な用意をした

(b)　隠　栖

1　病気を患い療養すること　　2　俗世間から離れて静かに暮らすこと

3　落ちぶれて身を隠すこと　　4　家にこもって外出しないこと

5　引退した人が、なお権力を握っていること

(c)　執　心

1　他に関心を向けずに心を一つに集中すること　　2　あることを願い続けること

3　あれこれと思いをいたすこと　　4　思い込んでいつまでもあきらめようとしないこと

5　悔い改めて仏道に帰依すること

問三　文中の空欄 A に入る最も適切なものを、つぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　楽　観　　2　厭　世　　3　悲　観　　4　絶　望　　5　感　傷

問四　文中の空欄 B にはノーベル文学賞を受賞した作家の名前が入る。最も適切な人名を、つぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　カフカ　　2　ドストエフスキー　　3　ヘミングウェー　　4　トルストイ　　5　プルースト

問五　つぎの1～5の中で、傍線部①「隠し続けてきた何ものか」とおなじ意味ではないものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　古代文明を偲ぶ、修復不可能な形で残っている最小限の遺構。
2　能に表現される、ありし日の才女が枯れ枯れと舞う老残の姿。
3　老いて不自由ではあるが、ギリシャ劇場の廃墟に立たせても不自然ではない老人の後ろ姿。
4　メキシコの港町で出会った老人の、テキーラを飲みながら話しかけてくる人懐っこい眼。
5　本当にエッセンシャルなもののみが残り、骨組みだけになってしまった脳。

問六　つぎの1～5の中で、傍線部②「『老い』の姿というのが、廃墟のようだったらよい」と著者が言う内容に最も近いものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　この世でもっとも美しいものは廃墟であるように、人間のもっとも美しい姿は老いた身体である、ということ。
2　人間の老いの姿の美しさが、ゆっくりと崩壊し続け、見る者にほろびゆく美しさを見事に伝える廃墟のようであるとよい、ということ。
3　この世でもっとも見事な美の実現の仕方が廃墟を作ることであるなら、人は自分をみがき続けて美しくした後、廃墟のようになれの果てを生きることがよい、ということ。
4　廃墟も人間の老いの姿も、それ自体がまさしく絶対であり、限界であり、孤高であるから美しいのであって、その過程が自然であれば、以前の姿は美しくなくてもよい、ということ。
5　人間の老いの姿の美しさが、見事に完成した後に自然の過程の中で修復しようもなく失われ、かつての姿を偲ぶ遺構のみが残る廃墟の美しさのようであったらよい、ということ。

問七　傍線部③「私には『老い』が爽やかなものに思えてくる」と著者が言う理由として、最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　枝が露出した木がすき間だらけの空間をささえているように、骨組みだけになってしまった脳がヒューヒューという爽やかな風を吹きならしてくれるように感じられるから。

2　老いによって現れる残された本質的なものが、私たちが生きてきてどうしても答えを見出すことのできなかった最後の何かを教えてくれるかもしれないから。

3　脳の生理的老化は防ぐことはできないが、そこで自分がどのような姿になっていくのかは、そうなってみないとだれにもわからないから。

4　私たちにとっての老いは、風の吹きぬける廃墟のようなものであり、どうしても立ち寄らなくてはいけない海辺の町のようなものであるから。

5　人間の老いとは、無に帰するためにはどうしてもたどらなくてはならないエッセンシャルな不条理であるから。

問八　つぎの1～5の中から、本文の内容と合致しないものをすべて選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1　廃墟のように、人間の老いた姿も様々なものが脱落した最後の骨組みのようなものだが、それは本来的に美しく崇高であり、人間の本質的な姿を現している。

2　廃墟が高度な文明の成熟と衰退という長い時間の過程によって生まれるのとおなじように、人間の美しい老いの姿にも、それが完成に至るまでの人生経験の蓄積が凝縮されている。

3　能の最高の秘曲は老女物と呼ばれる老婆が主役の作品であり、その主要なテーマはもはや人でも女でもなくなってしまった老残の主人公が、かつては美女であり才女であった若きわが身への未練を描いたものである。

4　瀬戸内海で会った終日釣りをしていた老人にも、メキシコの港町のバーで出会った老人にも、廃墟の美しさや、能の老女物に描かれた超越の姿と重ね合わせることができるような、老いの美しさがあった。

5　能の老女物が最奥の秘曲で、われわれ若い者の凡手ではとうていなしうるものではないように、繁った葉をすっかり落としてしまったような老境の身にならないと、人間はなぜ生き、また死なねばならないのかという不条理に答えを出すことはできない。